もういや「お国のために」には

高木敏子

ガラスのうさぎを溶かさないで

岩波ブックレットNO.65

もういや「お国のために」には

ガラスのうさぎを溶かさないで

高木敏子

「親のない子」といわれて
私は軍国少女だった
戦乱は泥沼化してついに
戦争への道はもういや
ガラスのうさぎは平和の輪になって

本文写真：NHKテレビ「ガラスのうさぎ」(1980年放映)
提供＝NHK

岩波ブックレット No. 65

「親のない子」といわれて

『ガラスのうさぎ』と題する私の戦争体験が本となって出版されて以来、それはそれは、たくさんのかたたちからお手紙をいただきました。五個の段ボールにあふれています。いちばん小さい人は、小学校二年生、いちばんお年を召していらっしゃるかたは、九十一歳の八王子の男のかたでした。

それらのお手紙の中で、いちばん多い質問が、

「敏子さん、あれからどんな青春時代をおくったのですか……」

です。このような質問には、うまくお答えできなくて、いつもほんとうに困りました。あまり平凡すぎて、いや紆余曲折があり過ぎてかな……、いずれにしても、ちゃんとお返事しなかったような気がします。

そこで今回、その青春時代を、ご報告しようとおもうのです。

戦争で両親を亡くした私は、いちばん大好きだった声楽をあきらめ、演劇もあきらめ、就職せ

ざるをえませんでした。就職先として、金融関係の会社を希望しました。そのころ、一九五〇(昭和二十五)年前後は財閥解体、インフレ等で、新聞の紙面には、毎日のように、会社の倒産の記事がのっていました。ですから私は、金融関係ならば、会社がつぶれることはないだろうとおもったのです。理由は簡単、お金を扱っている会社はつぶれない、私は単純にそうおもっていたのです。

しかし、この私の志望は、かなえられませんでした。先生が私を職員室にお呼びになって、

「江井さん、気の毒だけど、あなたは金融関係の試験は受けられないのよ」

「えッ？　どうしてですか、成績だってそんなに悪いと思いませんが……」

「成績ではないの、あなたには保証人がいらっしゃらないでしょ」

「保証人なら、兄がおりますけど……」

「お兄さんではだめなの、ご両親でなくては……両親健在の子弟ということになっているの」

「だって先生、そんなの無理です。両親は空襲で死んでしまったんですから……」

といったとたん、涙があふれてきてしまいました。こんなことってあるでしょうか。両親がいないから、進学をあきらめて、働こうと決心している私なのに……、働かなくては生きていけないですよ、と叫びたいおもいでした。先生はだまって私の肩に手を置かれて、涙ぐんでいらっしゃいました。私は悲しいのか、くやしいのか、なんだか胸がいっぱいになって、先生に抱きついて、

泣き出してしまいました。

あの夜のことは、いまでも忘れられません。家に帰っても、兄や義姉には言えず、また言ってもどうしようもないことだし――。親のない子、戦争が親を殺した、戦争さえなかったら……と、このときほどおもったことはありませんでした。だからといって、だれに訴えればいいのでしょう。朝の四時ごろまで眠れず、明けがた、やっとうとうとしたのをおぼえています。

それからの私は、いつも「親のない子」だってりっぱに生きてみせる、負けないから――とおもうようになりました。人さまに「親のない子」だからと後ろ指をさされるようなことだけはしまい、むしろ「親はないけれど……」といわれる子になりたいとおもいました。でないと、天国のお父さんやお母さんが悲しむもの――、心の片隅には、いつも潜在意識のように、このことがあったような気がします。

小さな会社に就職しました。

ただただまじめに、堅実に、地味に――不良になんかぜったいにならないぞと誓い、そうとう自分で自分をしばった生活、生き方をしてきました。お金がなかったせいもありますが、そろそろ若者が楽しみはじめたダンスも、スキーも、スケートもなんにもできませんでした。

でも私にも、楽しみはありました。仕事が終わってからの東京ＹＷＣＡでの勉強です。最初は、東京御茶ノ水の文化学院に行きたかったのです。しかし、ここは昼間部だけしかなくて、だめで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

青春時代の筆者

した。あきらめきれないまま、反対側の主婦の友社のところまで来て、ぐるーとまわって御茶ノ水駅に出ようとしたら、東京ＹＷＣＡがあったのです。掲示板をひょいと見ると、新学期の募集を書いたポスターが張ってありました。英文科の隣りに、日本文学科と書いてあるではありませんか。私は急にうれしくなって、五つ六つある階段をとぶように中に入っていきました。受付でパンフレットをいただいて見ると、「心理学」南博先生、「近代文学」島田謹二先生、「文学散歩」野田宇太郎先生。そのほか二つくらい教室がありました。うれしかったですね。さっきまでの〝しょんぼり〟ぶりはどこのどなたといいたいぐらいでした。

短期の講義でしたが、

それは楽しいものでした。

こうして、昼間会社で働いて、夜、学校へという生活が一年間つづきました。会社の仕事も経理部の所属となり、上司のかたがとてもよく指導してくださったので、いつの間にか簿記もおぼえ、試算表や原価計算までできるようになりました。珠算(しゅざん)だけは、小学生のときに三級をとり、戦後もまた珠算塾に通ったので、すこしは役に立ちました。

娘が大学生になったころ、私の二十歳前後のころの話をしたことがあります。娘は、

「お母さんのもともとの性格だったら、もっと自由な、のびのびとした生き方をしたかもね。そうしたら、だいぶその後の人生は変わっていたかもしれないね……」

といいました。

声楽も演劇もあきらめた青春でしたが、もうひとつ好きだった文学に、すこしでもかかわって生きてきたことは、いまになってみれば、よかったのかもしれないとおもいます。私はつねに「許される範囲内で」といった状態で、なにかをやってきたような気がします。そのとき、そのときをいっしょうけんめいに——。

夫があるとき、この話を聞いて、

「両親がいたら、どんなはね返りの娘になっていたことやら……」

こんな言葉も笑いながら受けられるようになったのは、ささやかでも、いまが幸せだからで

しょう。でも、これには約四十年という月日という時薬が必要でした。

だからといって、戦争の悲惨さを伝えていこうとする私の心は、すごしもゆらぐものではありません。

私は軍国少女だった

私は、一九三二(昭和七)年、東京本所(ほんじょ)(現・墨田区)に生まれました。生まれる前年に、満州事変がはじまりました。そして十三歳のとき、大東亜戦争(太平洋戦争)が敗戦によって終結しました。まさに私の幼児期、学童期、そして少女期の初めまで、戦争のまっただなかだったのです。

兄二人は「忠君愛国」の志(こころざし)を持ち、志願兵となりました。一人は陸軍特別幹部候補生、もう一人は海軍飛行予科練習生として——。父も一時軍属(ぐんぞく)として、満州(現在の中国東北

'31(昭6)・9・18	満州事変勃発
'32(昭7)・1・28	上海事変勃発
5・15	犬養毅首相射殺される
'33(昭8)・2・20	小林多喜二検挙、築地署で虐殺される(29日)
3・27	日本、国際連盟脱退
'36(昭11)・1・15	日本、ロンドン軍縮会議脱退
2・26	青年将校ら首相官邸など襲撃
11・25	日独防共協定調印
'37(昭12)・7・7	日中戦争はじまる
8・24	国民精神総動員実施要綱決定
'39(昭14)・5・12	ノモンハン事件起こる
9・1	ドイツ軍、ポーランドに進撃
10・18	物価統制令実施(ヤミ時代に入る)
'40(昭15)・9・27	日独伊三国同盟調印
11・10	紀元二千六百年記念祝典挙行
'41(昭16)・4・13	日ソ中立条約調印
10・18	東条英機内閣成立

部)に派遣されていました。国民学校(現在の小学校)では毎朝の朝礼で、

「きをつけ!」

の先生の号令のもとに、直立不動の姿勢をとり、「国旗掲揚」をし「君が代」を歌いました。そして校長先生は、

「兵隊さんはみんな、戦地でお国のために戦っているのです。銃後を守る私たちも、兵隊さんに恥ずかしくないよう、がんばりましょう」

と、話されました。

教室では担任の先生が、お国のために死んでいった「肉弾三勇士」や「鬼畜米英」「神国日本」の話をしました。私は早く大きくなって、看護婦さん(当時〝白衣(はくい)の天使〟といいました)になりたいとおもっていました。そ

'42(昭17)	12・8	対米英宣戦布告、真珠湾攻撃
	1・2	日本軍、マニラ占領
	2・15	日本軍、シンガポール占領
	6・5	ミッドウェー海戦、日本軍大敗
'43(昭18)	2・1	日本軍、ガダルカナル島撤退
	5・29	アッツ島の日本軍全滅
	9・8	イタリア、無条件降伏
	10・2	理工系以外の学生徴兵猶予停止
	10・21	学徒出陣壮行大会挙行
	12・24	徴兵年齢を満十九歳に引下げ
'44(昭19)	3・29	中学生の勤労動員大綱決定
	7・7	サイパン島日本軍全滅、民間人約一万人も自決
	7・18	東条内閣総辞職
	8・4	学童集団疎開第一陣出発
	8・10	グアム島日本軍全滅
	10・18	満十七歳以上を兵役に編入
'45(昭20)	3・10	米軍機B29、東京大空襲
	3・17	硫黄島全滅
	5・7	ドイツ、無条件降伏
	7・26	連合軍ポツダム宣言発表
	8・6	広島に原子爆弾投下
	8・8	ソ連、日本に宣戦布告
	8・9	長崎に原子爆弾投下
	8・15	終戦の詔書の放送
	8・30	連合軍総司令官マッカーサー、神奈川県厚木飛行場に到着

して、戦地で傷ついた兵隊さんを、ひとりでも多くお助けしたい、お国のお役に立つ人になりたいと心に決めていたのです。私たち少国民(当時、小学生のことをこう呼びました)は、勉強をいっしょうけんめいやるだけではなく、なにかお国のためになることをしたい、といつも考えていました。出征兵士の見送りや、英霊(戦死した人のこと)の無言の凱旋のお迎えなど——。

一九四〇(昭和十五)年十一月十日、お祭りよりもっと賑やかなことがありました。「皇紀二千六百年」のお祝いといって、国じゅう、町じゅうが、旗行列や提灯行列をやったのです。私は兄たちと市電通りに「花電車」を見に行きました。いつもの古ぼけた電車が、造花や、赤・青・黄色の豆電球で、それはびっくりするほどきれいでした。二台、三台と走っていきました。みんな一台通るごとに「万歳」「万歳」と大騒ぎです。そして、大きな声で、

〈金鵄輝く日本の
栄えある光、身に受けて
今こそ祝え、このあした
紀元は二千六百年
ああ一億の……

と、威勢よく歌いました。

学校でも、「神国日本」に生まれたことを感謝し、天皇陛下御一人にたいして、まず忠義をつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

くすようにと教えられました。

近年になって、また「紀元節」が「建国記念日」と名称が変わり復活して、〝国民の祝日〟となったとき、私はなにか悪い予感がして、背すじが寒くなりました。「非常時」が消えて、「有事」という言葉が復活したように——。

一九四一(昭和十六)年十二月八日の朝、私は、ラジオの大きな音で目がさめました。眠い目をこすりながら、二階から階下におりて行くと、父や兄、そしてわが家で働いていたお兄ちゃんたちが、

「やった！　やった！」

と、大声を上げて騒いでいました。私はびっくりしてしまいました。

私の家は、ガラスで工芸品をつくる工場でした。戦争がはじまる前は、盛鉢(もりばち)や置物をつくっていました。戦争中になると、軍の指定工場となり、注射器などを製造することになってしまったのですが……。

下町では、いつも〝朝飯前のひと仕事〟といって、朝早くから機械をまわして仕事をしたものでした。ところが、この日は、父をはじめ、だれも仕事をしていません。みんな仕事もしないで、どうしちゃったんだろう、こんなに騒いで――。そのときラジオから、

「臨時ニュースを申しあげます。臨時ニュースを申しあげます。帝国海軍は、ハワイの米艦隊にたいし、決死的な攻撃を敢行(かんこう)せり……」

みんな、また、わァーという歓声を上げました。

「日本は、カンニン袋の緒(お)が切れたのだ」

「日本の海軍は強い！　やっぱり強い！」

と口ぐちに叫んでいました。いま思いだしても、あのときの男の人たちの情景は、狂喜の沙汰(さた)でした。

そうした勝った、勝ったの騒ぎも、翌一九四二(昭和十七)年六月五日のミッドウェー海戦での敗北を境に、つぎつぎと暗いニュースになっていきました。しかし、国民は真実の報道を知らされず、「神国日本」はかならず勝つ、かならずまき返すとおもっていました。

翌一九四三年の四月十八日、連合艦隊司令長官山本五十六が、ソロモン諸島の上空で戦死しました。六月五日、日比谷公園で国葬がおこなわれました。この日、私は初めて、父の涙を見ました。にぎりこぶしで涙をふりはらっているのを――。

〜海行かば、水漬くかばね
山行かば、草蒸すかばね
大君の辺にこそ死なめ
かえりみはせじ

（「海行かば」詞・大伴家持、曲・信時潔）

ラジオからこの歌が一日中流れていました。

なにか子ども心にも、くやしくて、悲しくて、直立不動の姿勢でラジオに合わせて、私は泣きながらこの歌を歌いました。「軍神山本五十六」という名前は、いろいろの意味で、私の頭に、心に、強烈に残っています。二度とふたたび「海行かば」は歌いたくありません。

その年の秋、私の二人の兄は、志願兵となって、一人は陸軍に、一人は海軍へとすすんで入隊していきました。上の兄は十七歳、下の兄は十六歳でした。

合格通知がきた日、母と兄たちは、激しく言い争っていました。私は隣りの部屋から、じーっと聞いていました。母は、

「二十歳になれば、いやでも徴兵検査があって、軍隊に連れていかれちゃうよ。なにもそんなに急いで志願して行くことはないでしょ。死にに行くようなものよ」

「ぼくたちは、お国のために起ちたいのです。僕たちが起たずして、だれがこの国を守るんですか。いまは勉強などしているときではないのです。そんなの非国民です。ぼくたちは、非国民にはなりたくないのです。お国のために、この命を捧げたいのです。わかってください、お母さん、お願いです！」

母は、狂ったように泣いて、兄たちの軍隊行きを止めていました。しかし、兄たちは行ってしまいました。このときの私は、母をかわいそうだとおもうより、母にたいして、怒りさえ覚えていました。私だって男に生まれていたら、きっと兄たちのように〝お国のために〟ご奉公ができるのに――と、本気で、女に生まれたことをくやしいとおもっていました。

いま考えてみると、教育とはなんと恐ろしいものでしょうか。私は、そのとき十一歳、国民学校の五年生でした。りっぱな〝軍国少女〟だったのです。

そのころ、志願して兵隊に行った若者は、休暇で家に帰るとかならず、自分の出身校に行き、後輩たちにたいして、

平和の尊さを知ってほしいと訴える筆者

「自分に続け！　国を守るのはわれわれだ」と宣撫演説をしたのです。もう衣料統制で、中学校の制服などみんなヨレヨレのを着ていたときに、まっ白の、上着丈の短い、七つボタンの制服、同じくまっ白い帽子で現われる先輩は、まさに〝カッコイイ〟の一語につきるのでした。あこがれが、ヒーロー的な気分、悲愴感となり、若者を一途に、戦場へかり立てたのです。

〈若い血潮の予科練の
七つボタンは桜に錨
今日も飛ぶ飛ぶ
霞ケ浦に……
（「若鷲の歌」詞・西条八十、曲・古関裕而）

と、大合唱しながら――。

戦後しばらく過ぎて、この歌の作詞、作曲者の名前を知ったとき、私は愕然としました。この人たちは生き残り、戦後は甘い詩を書き、すてきな曲をつぎつぎに発表していましたから――。この人たちの作った歌にあこがれて、どれだけたくさんの若者が尊い血を流して死んでいったか――。

私はいまでも許せないのです。それはきっと、私が亡くなった母の気持ちがわかる年ごろになったからでしょう。また、娘と息子、ふたりの子どもの母になったからでしょう。どれだけ多くの母が、息子の「戦死」に涙したことでしょう。母は強しというけれど、賢く、時流に流されない母にならなければ――。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com